明石の君の大堰移住（上）（改稿）

平沢竜介

「明石の君の大堰移住（上）」は『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』第9号（平成十八年三月）に収載したが、昨年度「二条東院構想試論」（上）、（下）を発表した後、先に執筆した「明石の君の大堰移住（上）」に不備が多いことに気が付いた。そこで、以前発表した「明石の君の大堰移住（上）」を改めて書き直したのが本稿である。

一

おおよそ二年半に及ぶ須磨、明石での流謫を終え、都に戻った源氏は政権の中枢に就くとともに、新しい邸宅の造営に取りかかる。それは既に源氏と紫の上が住んでいた二条院の東に一町の新しい邸宅、二条東院を造営するものであった。この新しい邸宅の造営は、源氏が明石から帰京した夏から半年後の源氏二十九歳春に開始される。[1]

二条院にも同じごと待ちきこえける人を、あはれなるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将、中務やうの人々にはほどほどにつけつつ情を見えたまふに、御暇なくて外歩きもしたまはず。二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうのの心苦しき人々住ませまなど思しあててつくろはせたまふ。

（澪標(2)二八四―二八五）

澪標巻でこのように二条東院造営の開始が告げられたのに続き、物語は明石の君の出産について語り始める。

まことや、かの明石の心苦しげなりしことはいかにと思し忘るる時しなければ、公私のいそがしき紛れにえ思すままにもとぶらひたまはざりけるを、三月朔日のほど、このころや思しやるに人知れずあはれにて、御使ありけり。とく返り参りて、「十六日になむ。女にてたひらかにものしたまふ」と告げきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるを思すにおろかならず。などて京に迎へてかかることもせさせざりけむと口惜しう思さる。

宿曜に「御子三人、帝、后かならず並び生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふめり。おほかた、上なき位にのぼり世をまつりごちたまふべきこと、さばかり賢かりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消ちつるを、当帝のかく位に

かなひたまひぬることを思ひのごとうれしと思す。（中略）内裏のかくておはしますを、あらはに人の知ることならねど、相人の言空しからず、と御心の中に思しけり。いま行く末のあらましごと思すに、住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ、さるにては、かしこき筋にも成るべき人のあやしき世界に生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてん、と思して、東の院急ぎ造らすべきよしもよほし仰せたまふ。

（澪標(2)二八四―二八六）

源氏は帰京して以後、懐妊したまま別れてきた明石の君のことをずっと心に掛けてきたが、出産が予想される頃、明石に使者を送る。使者から明石の君が無事女子を出産したとの知らせがもたらされると、源氏はかつての宿曜が予言した「御子三人、帝、后かならず並び生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」との言葉を思い出す。父桐壺院の死後、様々な苦難を味わい忘れてしまっていたが、自らの子である冷泉帝の即位が実現したことにより、かつての高麗の相人たちによってなされた予言が実現しようとしている。高麗の相人らの予言の実現と明石の君との出逢いが住吉の神の導きであることを考慮すると、源氏は明石の君も特別な宿命を負った女性であり、明石の君との間に生まれた女の子は、宿曜が予言した后となる娘であるとの確信を抱くようになる。源氏は、将来后となるべき娘が明石の片田舎で生まれたことは気の毒で恐れ多いことであると思い、明石の君と娘を都に迎えようと二条東院の造営を急がせる。

源氏はその後も明石にしきりに消息を送り、明石の君に上洛を促す。松風巻冒頭、源氏三十一歳の秋に二条東院が完成する。

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対はことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありてこまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらひどもしおかせたまへり。

（松風(2)三九七）

二条東院が完成すると、二条東院の西の対には花散里が入居し、東の対には明石の君を迎え入れることが予定される。そして、右に引用した二条東院の完成を告げる記述に続いて、物語は明石の人々の様子を次のように語り始める。

明石には御消息絶えず、今はなほ上りぬべきことをばのたまへど、今はなほわが身のほどを思ひ知るに、こよなくやむごとなき際の人々だに、なかなか、さてかけ離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、物思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりのおぼえなりとてかさし出でまじらはむ、この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそあらはれめ。たまさかに這ひ渡りたまふついでを待つことにて、人笑へにはしたなきことといかにあらむ、と思ひ乱れても、また、さりとて、かかる所に生ひ出で数まへられざらむも、いとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。親たちもげにことわりとおもひ嘆くに、なかなか心も尽き果てぬ。

（松風(2)三九七―三九八）

源氏の帰京以後、明石には源氏からの手紙が絶えずあったが、二条東院の完成後は以前にもまして上京を促す手紙が頻繁に送られてくる。明石の君は源氏がそこまで自分の事を思ってくれるのは身に余る光栄と思う

一方、彼女自身源氏に対して強い思いを抱いたことから、源氏と再び逢えるようになることはこの上ない喜びであったであろう。しかし、都の高貴な女性たちでさえ源氏に様々な物思いをさせられていると聞くにつけ、身分の卑しい自分がそのような高貴な女性たちの間に交じってどれだけの寵愛を受けることができよう。自らの身の上のつたなさが知られ、この姫君に恥をかかせることになるだけではあるまいか。時たま源氏がふとやって来る機会を待つ身となって、世間の物笑いの種となり、きまりの悪い思いをすることであろうと思い乱れる。しかし、一方では姫君が明石のような田舎で成長し、人並みにも扱ってもらえなかったら、それも切ないことなので、一途に源氏の申し出を恨み背くこともできない。親たちも娘の嘆きをもっともなことと思い、途方に暮れてしまう。

そのような状況の中、父の明石の入道は明石の君の母の祖父に当たる中務宮が大堰川の近くに所有している山荘を思い出す。入道はその山荘を急ぎ修築し、二条東院が完成した直後、同じ年の秋に、明石の君の母、明石の君、明石の姫君の三人を大堰の山荘に移り住まわせることにする。

源氏の要請に反して、明石の君が上京しても直接二条東院に入らず大堰に移り住んだのは、明石の君が自らの出自の低さ故、都の高貴な女性たちとの交わりを避けたいという心理が働いたからであった。しかし一方で彼女は、高貴な身分の源氏との間に授かった姫君を貴族社会の一員として加えたいという強い気持ちを有していた。また、明石の君は源氏に深い愛情を抱いており、心の中では彼との再会を切望していたし、明石の姫君だけを都に遣わすことは心配であった。明石から都にほど近い大堰という場所に移り住むという決断は、右に述べた明石の君の心情にもっとも添うものであったといえよう。

確かに、二条東院完成直後の明石の君の心境を考慮すると、都の高貴な女性たちとの交じらいを回避しつつ、かつたまさかではあるが源氏の訪れも期待できる場所として都に近い大堰に移り住むというのは最も穏当な選択ということになるであろう。しかも紫の上の養女として二条院に引き渡す我が娘との距離も、明石よりはずっと近く、娘の様子を窺う上でも大堰はより好都合な場所であったであろう。このように考えると、明石の君が直接二条東院に入らず、大堰に移り住むという選択は十分説得力を持つように思われる。

二

しかし、明石の君およびその一家の心理的葛藤の結果としての大堰移住という解釈に対し、篠原昭二は明石の君の大堰移住が論理的には無意味なものであったと主張する。篠原は、大堰に移住しても明石の姫君が后候補とはなりえないことは明石にいた時と変わらないし、源氏の訪問できる場所に身を置くことは明石の君の「数ならぬ身の程」を認識させることにもなるであろうから、明石の君が大堰に移住したことは論理的には無意味であったとし、さらに次のように言及する。[2]

物語は姫君の格式に関わっており、姫君は薄雲の巻に至り大井から二条院へ移されるが、何故に明石から直接に移されるのではいけなかったのか。姫君の二条院入りは袴着を紫の上を養母として執り行うということが理由とされて、三十一年冬に行われたが、大井入りは同じ年の秋であった。姫君の后候補としての養育は不可欠であると明石方でも考慮されたとすれば、少なくとも袴着は光源氏の手でと期待されたにちがいないが、そのための準備などぎりぎりの時期を迎えて大井入りは行われたのである。物語としては、二年間の

逡巡、そしてこの切羽詰まった時期でのそれも京を離れた大井に入るということに、明石の女の苦悩を表現しているのであるが、それが追い詰められた選択であっただけに、直接の二条院入りを選ぶことも明石の女の思考の可能性としては、つまり物語の筋道としてはありえたであろう。そうして、二条東院において明石の女が後の六条院冬の町におけると同様の御方待遇を受ける物語もありえたであろう。一方にそのように展開する物語を想定してみるならば、物語の筋道においては、大井の物語はいわば物語の回り道であった。何故に回り道が取られたのかと言えば、もとより現にある大井の物語こそが作者の語らなければならない事柄であったからにほかならないであろう。

確かに、都の高貴な女性たちとの交じらいに不安があるにせよ、源氏が勧めているのであるから、明石の君が明石から二条東院の東の対に直接入るという選択をしてもあながち無謀なものとは思われない。また、もし明石の君が大堰に移り住み、明石の姫君だけを紫の上の養女として二条院に住まわせたとしても、ある程度年月が経った後、明石の君が二条東院に入るということも十分考えられたであろう。事実、明石の君は大堰に移ってから四年後、紫の上、秋好中宮、花散里といった錚々たる女性たちが住むことになる六条院に入居している。ならば、大堰に移ってしばらくしてから明石の君が二条東院に入居することも十分可能であったはずである。

物語で明石の入道の口を通して語られる「にはかにまばゆき人中いとはしたなく、田舎びにける心地も静かなるまじきを」（松風(2)三九九）という説明は、明石の君の心理に即して考えればそれなりの説得力を持つといえるであろうが、篠原が言うようにそれが「切羽詰まった時期」での「追い詰められた選択」であったとするなら、大堰という回り道を取らずに直接二条東院入りを選ぶという選択も、彼女の心理に即して十分にありえたのではなかろうか。

また、物語の構想という観点からすると、既に若紫巻執筆以前の段階で、物語は二条院の東に二条東院を造営し、二条院と二条東院を合わせた二条院・二条東院空間の西、すなわち二条院の西の対に東・山・仏を表象する紫の上、二条院二条東院空間の東、すなわち二条東院の東の対に西・海・神を表象する明石の君を配置し、さらに二条院に西・海・神を表象する明石の姫君、東・海・神を表象する秋好中宮、二条東院に東・山・仏を表象する末摘花、西・山・仏（あるいは西・海・神）を表象する玉鬘を住まわせることで、二条院二条東院空間をあまねく東と西、山と海、仏と神を表象する空間とし、同時に二条院の西の対に東、春を表象する紫の上、二条東院の東の対に西、秋を表象する明石の君、西の対に南、夏を表象する花散里、北の対に北、冬を表象する末摘花を配置して四方四季の邸を完成させ、源氏の絶対的な王者性を十二分に示す空間を構築することが企図されていた。[3]

にもかかわらず、物語の始発とも言うべき若紫巻執筆時点で、源氏の栄華の集大成ともいうべき邸となるように構想された二条東院構想が、明石の君が上京しても大堰に留まり、二条東院に入居しないため実現しないというのはどういうことであろうか。本来なら、明石の君は、明石から二条東院に直接入るべきである。物語においてそこに立ち寄る必要もない大堰の物語が語られ、かつその後明石の君が入居するはずの二条東院への入居が語られないという事実は、明石の君の大堰移住が単に明石の君の心理的葛藤の結果と言うだけでは説明しきれないものを含んでいる。物語作者は明石の君を二条東院に直接入居させず、なぜ大堰に移

住させたのか、なぜ大堰移住後明石の君は二条東院に入ることがなかったのか。明石の君の大堰移住は大きな謎を秘めている。[4]

三

明石母子が移り住むことになる大堰の山荘は、明石の君の母の祖父にあたる中務宮が所有していた山荘として物語に登場してくるが、『花鳥余情』は「醍醐御子中務卿兼明親王山庄在大井河畔号雄蔵殿也此親王を明石上の母君の祖父といへり」とし、[5]この中務宮の準拠として醍醐天皇皇子兼明親王をあてる。兼明親王は延喜十四年（九一四）誕生、延喜二十年、源の姓を賜って親戚に下り、天禄二年（九七一）左大臣に任ぜられるが、貞元二年（九七七）藤原兼通の策謀によって親王とされ、政権より遠ざけられた人物で、中務宮の唐名に由来する「前中書王」という呼称のほか、「小倉の親王」、「嵯峨の隠君子」との呼称を持つ。[6]

嵯峨の小倉山山麓、大井川河畔に別荘を持つ中務宮という点で、明石の君の母の祖父の中務宮と兼明親王は共通性を持つことから、明石の君の母の祖父の中務宮の準拠として兼明親王を考えてよいであろう。

しかも、大堰の山荘の様は、明石の君が大堰の山荘に移ると聞いて、源氏が惟光を大堰に遣わして準備をさせたその報告に「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまなむはべりける」（松風(2)四〇一）とあり、明石の君一行が大堰の山荘に到着した場面では、「家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえければ、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり」（松風(2)四〇七）と記される。

兼明親王には

をくらにすみはしめける秋、月をみて
をくら山かくれなき代の月かけにあかしのはまをおもひこそやれ
（和漢兼作集・七・秋部中）

という歌があり、[7]これは親王が承平三年、播磨権守として任地に赴いた経験をもとに詠まれた歌と推定されるが、[8]小倉山の月から明石の浜を思いやるというこの歌の内容と山荘の様が明石の海岸と似ているとする物語の表現は、物語の山荘が兼明親王の山荘に重ね合わされていることになり、明石の君の母の祖父の中務宮が兼明親王を準拠として造型されていることをさらに補強することになる。

また、先に引用した明石の君一行が大堰に到着した場面で「昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり」（松風(2)四〇七）と感ずる主体は、明石の君ではなく、母君であり、「昔のこと」とは中務宮在世中のことと見るのが適切であろうから、明石の君の母の祖父の中務宮が兼明親王に比定されるとすると、この「昔のこと」に兼明親王在世中のことを重ねて読み取ることができるであろう。

源氏は明石の君が大堰に移った後、しばらくして大堰を訪れ、明石の君と再会を果たす。翌朝源氏は大堰の邸の庭の手入れを指図し、自らも「東の渡殿の下より出づる水の心ばへ」を繕おうと庭に降り立ち、明石の君の母尼君を見出し言葉を交わす。

昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかごとがましう聞こゆ。

住みなれし人はかへりてたどれども清水は宿のあるじ顔なる

わざとなくて言ひ消つさま、みやびやかによしと聞きたまふ。

「いさらゐははやくのことも忘れじをもとのあるじや面がはりせるあはれ」と、うちながめて立ちたまふ姿にほひを世に知らずと

のみ思ひきこゆ。　（松風(2)四一三）

この場面では、「昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに」と兼明親王を思わせる人物に話題が及ぶと、「水の音なひ」が「かごとがましく」聞こえ、尼君の歌では清水が「宿のあるじ顔」をしているとされ、源氏の歌でも「いさらゐはやくのことも忘れじを」と詠じられるというように、遣水があたかも邸の主であるかのようであり、昔すなわち兼明親王在世中のことをよく知っているのは自分、遣水であるとの表現がなされる。この遣水は、尼君の歌では「清水」つまり湧き水とされ、源氏の歌では「いさらひ」すなわち小さな井戸とされることから、湧き水から引いた遣水と解される。また、この遣水については、先に引用した明石の君が大堰の邸に着いた直後の邸のたたずまいを表現する部分でも、

年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。造りそへたる廊などゆゑあるさまに、水の流れもをかしうしなしたり。　（松風(2)四〇七）

と、邸に欠かすことのできないものとして語られる。

このように大堰の邸において湧き水から引いた遣水が、邸の様を語るとき重要な要素として強調され、かつその湧き水から流れ出る遣水が兼明親王に擬せられる中務宮在世中のことを最もよく知っているかのような描写がなされる時、そこにこの山荘を建てた当初、兼明親王が亀山から水が出ることを祈ったところ、即座に水が湧き出たという事跡が想起されるのではないだろうか。

『扶桑略記』天延三年八月十三日条に「左大臣源朝臣兼明於亀山祈水。祭文作之。其詞云々。世伝云。即時清水涌出云云」とあり、[9]『花鳥余情』にも「兼明親王、天延三年八月十三日、亀山に祈水祭文あり、後の世までも小倉山のふもと、篁の中にその水のあとあるよし、或記にしるし侍り」とあることから、[10]兼明親王が亀山に祈るとたちまち水が湧き出たとの事実が確認される。

『扶桑略記』に記されているように、兼明親王は亀山から水の出ることを祈った際、祭文を作ったが、その祭文は後に『本朝文粋』にも収められるほど有名なものであり、紫式部もその存在を知っていたと想像される。その祭文の全文を『本朝文粋』から引用してみると、次のようになる。[11]

祭亀山神文　　前中書王

維天延三年乙亥之歳、八月十三日壬子、吉日良辰、左大臣従二位源朝臣兼明、謹以二香花之薦一、敬祭二亀山之神一。伏惟、云レ神云レ鬼、無レ親無レ疎。慎謹是臧、恭敬是享。致レ誠以祈レ之、豈不二欽饗一哉。兼明年齢衰老、漸欲二休閑一。爰尋二先祖聖皇嵯峨之墟一、請二地於栖霞観一、占二此霊山之麓一。初求二於易筮一吉也。問二於相者一最也。取二於中心一得也。三者相須。即披二草莱一、結二茅茨一、時々往来、棲息漸尚矣。今所二恐思一者、実是愚暗之身、不レ知二神明之禁遏一、以有レ所二触犯一矣。人何無レ過。謝レ過謝レ罪、神之所レ宥也。神若有レ所レ怒者、早宥二其過一。神若可レ成レ喜者、弥加二擁護一。神不二自貴一、以二人敬一則貴。人不二自安一、依二神之助一則安。伏願、神霊幸垂二鑑察一、駆二却邪鬼一、掃二去毒虫一、人無二疾病盗賊之憂一、室無二風雨水火之害一、至二于牛馬一、無レ有二凶損一。是神之恩也、人之幸也。春秋敬祭、将レ伝二子孫一。伏請、尊神必垂二欣享一。再拝。謹重言、伏見二此山之形一、以レ亀為レ体。夫亀者玄武之霊、司レ水之神也。甲虫三百六十之属、在二於北方一、霊亀為二之長一。或背負二蓬宮一、不レ知二幾千里一、或身

遊二蓮葉一、不レ知二幾万年一。神霊之至誠無量者也。他山莫レ不レ有レ水、此山豈可レ乏レ水乎。夫水者稟二秋気於庚之金一、盛二正位於北方一、養二春味於震之木一、帰二末流於東南一。群品為レ之亭毒、万物為レ之生育。故山頂猶有レ水、山趾豈無レ水乎。而此地無レ水、進退惟谷。伏望、山神開二視聴一、起二贔屓一、引二水脈一而通二洪流一、穿二石竇一而下二飛泉一。然則上以薦二神明鬼物一、中以用二飲食湯沐一、前則潔二耳目一導二心胸一、而長二養幽閑之志一、後則除二煩穢一滌二汚濁一、而収二得払拭之便一。是神之祐也、人之望也。昔弐師将軍抜二佩刀一而刺レ山、飛泉涌出、戊己校尉正二衣冠一而拝レ井、奔流激射。感之至也。若不二感応一者、是無二神霊一也。先以レ水為二事験一、将レ知二神之有無一矣。神誠有レ霊、答二此祈請一。再拝。

（維れ天延三年乙亥の歳、八月十三日壬子、吉日良辰、左大臣従二位源朝臣兼明、謹みて香花の薦を以て、敬みて亀山の神を祭る。伏して惟るに、神と云ひ鬼と云ふ、親無く疎無し。慎謹是れ臧とし、恭敬是れ享く。誠を以て之を祈る、豈に欽饗せざらんや。兼明年齢衰へ老い、漸く休閑せんと欲す。爰に先祖聖皇嵯峨之墟を尋ね、地を栖霞観に請ひ、此の霊山の麓に占む。初め易筮に求むるに吉なり。相者に問ふに最なり。中心に取るに得なり。三者相須つ。即ち草莱を披き、茅茨を結び、時々往来し、棲息すること漸く尚し。今恐れ思ふ所は、実に是れ愚暗の身、神明の禁遏を知らず、以て触れ犯す所有ることを。人何ぞ過無からん。過を謝し罪を謝するは、神の宥むる所なり。神若し怒る所有らば、早く其の過を宥めよ。神若し喜を成すべくば、弥擁護を加へよ。神は自ら貴からず、人の敬するを以て則ち貴し。人は自ら安からず、神の助に依りて則ち安し。伏して願くは神霊幸に鑑察を垂れ、邪鬼を駆り却け、毒虫を掃ひ去り、人に疾病盗賊の憂なく、室に風雨水火の害無く、牛馬に至るまで凶損あること有ることなからしめ給へ。是れ神の恩なり。人の幸なり。春秋敬祭し、将に子孫伝へんと。伏して請ふ尊神必ず欣享を垂れよ。再拝。謹んで重ねて言さく、伏して此の山の形を見れば、亀を以て体と為せり。夫れ亀は玄武の霊、司水の神なり。甲虫三百六十の属、北方に在りて、霊亀之が長為り。或いは背に蓬宮を負ひて、幾千里といふことを知らず、或いは身蓮葉に遊びて、幾万年といふことを知らず。神霊の至誠無量なる者なり。他の山水有らざるといふこと莫し、此の山豈に水に乏かるべけんや。夫れ水は秋の気を庚の金に稟けて、正位を北方に盛んにし、春の味を震の木に養いて、末流を東南に帰す。群品之が為に亭毒し、万物之が為に生育す。故に山頂猶水あり、山趾豈に水無けんや。而て此の地水無し、進退惟れ谷まりぬ。伏して望むらくは、山神視聴を開き、贔屓を起こし、水脈を引きて洪流を通じ、石竇を穿ちて飛泉を下せ。然らば則ち上は以て神明鬼物に薦め、中は以て飲食湯沐に用ひ、前には則ち耳目を潔うし、心胸を導きて、幽閑の志を長養し、後には則ち煩穢を除き汚濁を滌いて、払拭之便を収め得ん。是れ神の祐なり、人の望みなり。昔弐師将軍佩刀を抜きて山を刺ししに、飛泉涌き出で、戊己校尉衣冠を正して井を配せしに、奔流激謝しき。感の至るなり。若し感応せずは、是れ神霊無きなり。先ず水を以て事の験と為し、将に神の有無を知らんと。神誠に霊有らば、此の祈請に答へよ。再拝。）

明石の君の移り住んだ大堰の邸の有様が記述されるに際して、湧き水から引いた遣水が大きく取り上げられ、その遣水が兼明親王に比定される中務宮在世中の時代を想起させるものとして記述されていることからすると、物語作者はそれらの表現から中務宮兼明親王がこの山荘に湧き水

の出ることを祈ったこの祭文を読者に呼び起こそうとしているのではないだろうか。そう思ってこの祭文を読んでみると、この亀山山麓の地に関して注目される表現のあることに気付く。それは祭文の中央部

伏見此山之形、以亀為体。夫亀者玄武之霊、司水之神也。甲虫三百六十之属、在於北方、霊亀為之長。或背負蓬宮、不知幾千里、或身遊蓮葉、不知幾万年。神霊之至誠無量者也。他山莫不有水、此山豈可乏水乎。夫水者稟秋気於庚之金、盛正位於北方、養春味於震之木、帰末流於東南。群品為之亭毒、万物為之生育

という部分である。この表現によれば、亀山というのはその名の通り、亀の形をしていることから、五行思想に基づくならば、玄武のいる水の地であり、方位でいうと北にあたり、西の金の秋の気を稟けて、東の木、季節でいうと春に水を流し、万物を生育させるという。また、祭文には記されていないが、五行思想によれば水に季節をあてると冬となる。

明石の君の移り住んだ大堰の邸が、兼明親王の山荘に比定されるとすると、明石の君の大堰の山荘も兼明親王の亀山山麓の山荘と同様、五行思想でいうところの水の地にあたり、方位でいうと北、季節でいうと冬を表象することになる。

四

大堰の山荘が物語に初めて登場する場面では、

昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえける領じたまひけるところ、大堰川のわたりにありけるを　（松風(2)三九八）

と、山荘が大堰川の畔にあることが紹介される。明石の君一行が大堰に移り住むと聞いて、源氏が準備のため惟光を大堰の山荘に遣わすと、帰ってきた惟光は源氏に大堰の山邸の様子を

あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむ侍りける　（松風(2)四〇一）

と報告し、物語はそれに続く地の文で

造らせたまふ御堂は、大覚寺の南に当たりて、滝殿の心ばへなど劣らずおもしろき寺なり。これは川づらに、えもいはぬ松陰に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。　（松風(2)四〇一）

と語る。

明石の君一行が都に上る際、船を用いるのも明石の君と水との関係の深さを示すものであろう。大堰の邸に入ると、

家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。造りそへたる廊などゆゑあるさまに、水の流れもをかしうしなしたり。　（松風(2)四〇七）

と、明石の浦と同じような川づらの風景や遣水の流れが描かれる。源氏の大堰訪問に際しては、先に引用した遣水での源氏と尼君との会話の場面が語られ、松風巻に続く薄雲巻の冒頭でも、大堰の住まいの様子が

冬になりゆくままに、川づらの住まひいとど心細さまさりて　（薄雲(2)四二七）

と叙せられる。[12] このように、松風巻から薄雲巻の冒頭にかけて大堰の地と水が分かちがたく結びついている様が語られるが、このことは物語作者がこの大堰の地を五行思想の水の地に当てようとしたことを示唆していよう。

また、明石の君が大堰に移り住むのは秋であるが、彼女の人生の中で

最も辛い出来事である姫君との別れは、大堰の冬の雪景色の中で語られる。

雪、霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまざまにもの思ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見ゐたり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出でゐなどもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよよかなるあまた着て、ながめたる様体、頭つき、後手など、限りなき人と聞こゆともかうこそはおはすらめと人々も見る。落つる涙をかき払ひて、「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、

雪ふかみみ山の道は晴れずともなほふみかよへあと絶えずして

とのたまへば、乳母うち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめやは

と言ひ慰む。

この雪すこしとけて渡りたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれ人やりならずおぼゆ。わが心にこそあらめ、辞びきこえむを強ひてやは、あぢきな、とおぼゆれど、軽々しきやうなりとせめて思ひかへす。いとうつくしげにて前にゐたまへるを見たまふに、おろかには思ひがたかりける人の宿世かなと思ほす。この春より生ほす御髪、尼のほどにてゆらゆらとめでたく、つらつき、まみのかをれるほどなど言へばさらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇、推しはかりたまふにいと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。「何か、かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひあはれなり。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて「乗りたまへ」と引くもいみじうおぼへて、

末遠き二葉の松にひきわかれいつか木高きかげを見るべき

えも言ひやらずいみじう泣けば、さりや、あな苦しと思して、

「生いそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をならべんのどかにを」と慰めたまふ。さることとは思ひ静むれど、えなむたへざりける。乳母、少将とててやかなる人ばかり、御佩刀、天児やうの物取りて乗る。副車によろしき若人、童など乗せて御送り参らす。道すがら、とまりつる人の心苦しさを、いかに、罪得らむと思す。

（薄雲(2)四三一―四三四）

十二月、雪や霰が降り続く日々、大堰の山荘はただでさえ心細さが募るが、姫君を手放すことを決意した明石の君は、様々に物思いをしなければならぬ我が身の上を嘆きつつ、常にもまして姫君を慈しみながら過ごしている。雪が降り積もった朝、端直に出て物思いにふけりながら汀の氷などを眺めて、「姫君を二条院に渡したら、このような冬の日はどんなに寂しい気持ちになるだろうか」と想像して、乳母と歌を詠み交わす。雪が少し解けた頃、源氏がやって来る。いつもなら源氏の来訪に胸をときめかすのに、今日は姫君を引き取りに来たと思うと胸が張り裂けるような思いがする。源氏は姫君のかわいらしさに魅了されつつも、一方ではその姫君を明石の君から引き離すことが彼女にとってどれほど辛いことなのかと推察し、繰り返し明石の君を慰める。明石の君は、「姫君が私のように取るに足らない身分の者ではないように扱っていただけるなら」と言いつつも、こらえきれず泣き崩れる。幼さ故に母親の心中を察することができない姫君は無心に車に乗ろうとし、母親の袖を捉え

て母も車に乗ることをせがむ。明石の君は感極まって源氏に歌を詠みかけ、源氏は将来明石の君、姫君とともに暮らすことを誓う歌で応えるが、姫君とともに大堰を後にする。

この明石の君と姫君の悲痛な別れは、大堰の冬の雪景色を背景に語られるのであるが、明石の君が源氏と最初の逢瀬を持ったのが秋であり、明石から大堰に移り住むのも秋であったのに対し、明石の君にとって最も辛い姫君との別れが冬に語られるという事実は、明石においては秋という属性を持っていた明石の君が、大堰に移り住むことで冬という属性が賦与されたことを意味しよう。

さらに、大堰の山荘の描写に際して、松がしばしば描かれることも留意される。先にも引用したが、明石の君が移り住む前に源氏が大堰に遣わした惟光の報告の後、大堰の山荘の様が次のように語られる。

これは川づらに、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。

（松風(2)四〇一）

また、明石の君が大堰に入った直後には、

なかなかもの思ひつづけられて、棄てし家居も恋しうつれづれなれば、かの御形見の琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたる方にうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあがりて、

身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く

御方、

ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰かわくらん

（松風(2)四〇七―四〇八）

という描写もあり、大堰を訪れた源氏が琴を弾くのを聞いて、明石の君は、

変わらじと契りしことをたのみにて松のひびきに音をそへしかな

（松風(2)四一四）

と詠ずる。久しぶりに再会した、靫負の尉と明石の君の女房との会話でも、女房が

八重たつ山は、さらに島がくれにも劣らざりけるを、松も昔のとたどられつるに、忘れぬ人もものしたまひけるに頼もし

（松風(2)四一七）

と言う。松は大堰という場を象徴する重要な景物なのである。

また、明石の姫君は祖母尼君によって

荒磯蔭に心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今は頼もしき御生ひ先と祝ひきこえさするを、浅き根ざしゆゑやいかがとかたがた心尽くされはべる

（松風(2)四一二―四一三）

と「二葉の松」に喩えられ、薄雲巻の姫君を二条院に引き渡す別れの場面でも、

末遠き二葉の松のひきわかれいつか木高きかげを見るべき

と明石の君が姫君を二葉の松に喩えて、将来姫君に再会することができるかどうか不安を表明するのに対し、源氏が

生いそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をならべん

（薄雲(2)四三四）

と、自らと明石の君を相生の松に、姫君を小松に喩え、将来三人がともに暮らせることを誓うというように、明石の姫君が小松に喩えられるばかりでなく、明石の君も松に喩えられており、松は大堰を象徴するばかりでなく、明石の君や姫君をも象徴する植物として機能している。

松は『論語』子罕篇に「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを

知る」[13]、あるいは『古今集』冬の部に「雪降りて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ」（巻六・三四〇・読人しらず）とあるように[14]冬の植物とされており、大堰の地および明石の君が冬を代表する植物、松によって表象されることも、この地が冬を表し、そこに住むことになった明石の君も冬という属性を持つに至ったことを端的に示していよう。後に明石の君が移り住む六条院の冬の町にも、「隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり」（少女(3)七九）と御倉町との境に松が多く植えられる。

以上の検討より、大堰は水の地であり、明石の君は大堰に移り住むことによって、本来有していた西、秋という属性に代わって、北、冬という属性を賦与されることになったと考えられる。明石から都に向かったにもかかわらず、本来入居が予定されていた二条東院の東の対に入居することなく大堰に山荘に移り住むという展開は、いうまでもなく物語作者のなせる技である。物語作者は二条東院構想が完成を迎えるその直前になって、若紫巻執筆時点から思い描いてきた明石の君を二条東院の東の対に西、秋を表象する女性として配置するという構想を変更し、彼女が本来持っていた西、秋という属性の代わりに、彼女に北、冬という属性を賦与したのである。その結果、明石の君は二条東院の東の対に入ることができなくなり、二条東院構想も放棄されることとなった。では、なぜ物語作者はそのような変更を行わなければならなかったのであろうか。

五

若紫巻執筆開始時点から西、秋を表象するとされてきた明石の君が、二条東院が完成した直後に北、冬を表象する女性とされたのは、彼女の身分の低さによるものであったと想像される。日本では古来、春と秋の優劣を論じることが盛んに行われてきたが、そのことは取りも直さず春と秋が夏と冬に比べて興趣に富み、賞翫すべき季節であったことを示している。すなわち、春と秋は、夏と冬に対して格の高い季節であった。

『源氏物語』では、当初春を表象するのは紫の上であるのに対し、秋を表象するのは明石の君であった。が、紫の上と明石の君では二人の身分があまりにも違いすぎる。確かに、源氏からの愛情という点では二人は同等であると言ってもいいが、兵部卿宮と按察大納言の娘との間に生まれた紫の上と大臣の息子とはいえ、近衛中将の職を棄てて、播磨の国の国守となり、任期が終わるとそのまま播磨に土着した明石の入道の娘である明石の君とでは、その身分において大きな懸隔がある。

二条東院構想を思い描いて若紫巻の執筆に取りかかった頃の物語作者は、まだ明石の君の身分の低さという問題をさほど深刻には考えていなかったのではなかろうか。源氏が深い愛情を注いだ二人の女性、かつ源氏の栄華を確立する上で重要な役割を果たす明石の姫君の実の母と育ての母、このような対照的な性格を考慮して、物語作者は紫の上と明石の君を一対の存在と考え物語を語り始めたのではなかろうか。

物語作者は、紫の上に東、山、仏、明石の君に西、海、神という属性を賦与し、源氏を仏法における理想の王者転輪聖王とするとともに、神の王海竜王とする。海竜王の邸は四方四季でなければならないから、物語作者は紫の上に東、春、明石の君に西、秋、花散里に南、夏、末摘花に北、秋を表象させることとする。そして、源氏の住む二条院の西の対に東、春を表象する紫の上、二条東院の東の対の対に西、秋を表象する明石の君、二条東院の西の対に南、夏を表象する花散里、二条東院の北

の対に北、冬を表象する末摘花を配置するという空間の構築を目指す。二条院の西の対に東、春を表象する紫の上を配し、二条東院の東の対に西、秋を表象する明石の君を置くというのは、配置が逆のように思われるが、先に指摘したように紫の上が東、山、仏を表象し、明石の君が西、海、神を表象するとすると、東を表象する紫の上を二条院・二条東院空間の西、西を表象する明石の君を二条院・二条東院空間の東に置くことで、東と西の表象が混ざり合い、二条院・二条東院空間は東と西、山と海、仏と神という表象があまねく存在する空間となる。確かに、身分の上からいえば、紫の上が優位ということになるであろうが、現実世界と異なる物語世界の中であってみれば、物語作者は明石の君が紫の上と同等の重みを持って存在することも許されると二条東院構想を着想した時点では考えていたのではないだろうか。

しかし、物語が進むにつれて、物語作者は紫の上と明石の君を対等な立場に置くことの難しさを感じ始めたと思われる。物語執筆開始当初は、物語という非現実的な世界をも容認する文芸作品の性格からして、播磨の田舎で育った明石の君が都で紫の上と同等の重みを持って生活することも許されると考えていたが、実際に物語を書き進めていくにつれて、明石の君の身の程の低さが彼女が都で生活する際大きな障害となることに気づかざるを得なくなったのではなかろうか。

源氏二十九歳の秋、源氏は願はたしのため住吉社に参詣するが、同じ時期昨年今年と参詣できなかった明石の君も住吉社に参詣し、源氏の住吉参詣の行列と邂逅する。

をりしもかの明石の人、年ごとの例のこと詣づるを、去年今年はさはることありて怠りけるかしこまりとり重ねて思ひ立ちけり。舟にて詣でたり。岸にさし着くるほど見れば、ののしりて詣でたまふ人けはひ渚に満ちて、いつくしき神宝を持てつづけたり。楽人十列など装束をととのへ容貌を選びたり。「誰が詣でたまへるぞ」問ふめれば、「内大臣殿の御願はたしに詣でたまふを知らぬ人もありけり」おて、はかなきほどの下衆だに心地よげにうち笑ふ。げに、あさましう、月日もこそあれ、なかなか、この御ありさまをはるかに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ、さすがにかけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて仕うまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておぼゆかなう思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らで立ち出でつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれたり。

（澪標(2)三〇一―三〇三）

源氏一行の豪華、盛大な行列を目の前にして、明石の君は改めて源氏とおのれの身の程の格差を確認せざるを得ない。

物語において、明石の君のこのような切実な身の程意識が語られるということは、取りも直さず物語作者が明石の君の身の程の低さを強く意識し始めたことを示していよう。物語であるから現実にあり得ないようなことを語っても問題ないと考えていたであろう物語作者も、物語が進むにつれて、やはり身分の低い明石の君が都で紫の上と対等の立場で生活することに違和感を感じ始めたのではなかろうか。二条東院構想では、花散里や末摘花は明石の君より一段低い位置に置かれているが、花散里は麗景殿の女御の妹であり、末摘花も落ちぶれたとはいえ常陸の宮の娘であるというように、いずれも上流貴族の娘である。そのような上流貴族の娘より、身分が著しく劣る明石の君が二条院・二条東院空間で彼女たちより上位に位置するというのは、やはり当時の貴族社会の通念からして認められないものだったのではなかろうか。

しかし、一度開始された二条東院構想は、その構想が周到に組織されていたが故に、そこから逸脱することを容易に許さなかった。源氏二十九歳の二月に、

二条院の東なる宮、院の御処分なりしを、二なく改め造らせたまふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませまなど思しあててつくろはせたまふ。（澪標(2)二八四―二八五）

と二条東院の造営開始が語られた同じ年の四月、蓬生巻で偶然末摘花を見出した源氏は、末摘花を手厚く庇護し、

二条院いと近き所を造らせたまふを、「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童べなど求めさぶらはせたまへ」（蓬生(2)三五三）

といった手紙を末摘花に贈る。さらに蓬生巻巻末では、

二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。（蓬生(2)三五五）

と、末摘花の二条東院入居が語られる。蓬生巻は、澪標巻と時間的には平行して語られる巻であるが、執筆の順序からすると澪標巻が書かれた後に書かれた巻と思われる。澪標巻冒頭で語られた二条東院造営は、蓬生巻でも継続されている。

松風巻冒頭に至って二条東院の完成が語られる。二条東院構想はその構想が周到で堅固であるが故に、そこに変更を加えることは極めて困難であり、その完成まで語り続けられねばならなかった。

しかし、物語作者の脳裏では、二条東院造営開始時から完成時に至る間に、二条東院構想に対する考え方は大きく変化していったのではないだろうか。物語作者は、明石の君の身の程の低さと二条東院構想における位置づけが、現実と余りに乖離しているのではないかという危惧を次第に募らせていったのではないかと想像される。

当時の社会通念から考えると、明石の君が花散里や末摘花より格上の女性として遇されるということはあってはならないことであった。もし、二条東院構想に従って、明石の君を紫の上と花散里や末摘花より格上の存在として描こうとすれば、物語は現実離れした安易な理想世界を構築して完結することになる。このような終わり方は、物語作者にとってこれまで書き続けてきた物語の価値を貶めるものと感じられたのではないだろうか。

物語作者がこれまで書いてきた物語は、従来の物語と比べると極めてリアリティの高いものであった。そのような物語を非現実的な結末で締めくくるということは、やはり容易にできることではなかった。ここまで書いてきた物語と同等の現実感を持って物語を終えようとするなら、やはり明石の君をその身の程にふさわしく他の女性たちより一段低い位置に置き、彼女がそうした状況の中で隠忍自重しながらも、最終的に明石一族の栄華に貢献するという物語に練り直す必要がある。物語作者の関心は、明石の君の最終的な栄華の道筋を当時の現実世界の道理に従って描くという方向に移っていったのではなかろうか。

しかし、明石の君は紫の上とともに源氏の愛情を受ける存在であり、彼女が明石の姫君を生み、姫君が紫の上の養女となって入内し、中宮となることで明石一族に繁栄をもたらすという構想だけは棄てることはできなかった。明石の姫君はやはり源氏の四方四季の邸に住まう必要があった。だが、明石の君の身の程を考慮すると、明石の君に高い地位を与えることはできない。彼女の身分は、源氏の邸で最も低い位置に置く必要がある。そのためには、四方四季の邸において、明石の君を北、冬を表象する女性とする必要がある。

そこで考え出されたのが、明石の君の大堰移住ではなかったか。五行思想における水の地と比定される兼明親王の大堰の山荘に明石の君一行を移住させることで、彼女を西、秋を表象する娘から北、冬を表象する娘へと変身させることが可能になる。松風巻冒頭部分で明石の君一行の大堰移住を描いた時点で、若紫巻以降物語作者を呪縛し続けてきた二条東院構想はようやく破棄され、明石の君を大堰に住まわせることで、彼女に西、秋という属性に代わって北、冬という属性を与えることがようやく可能となったのである。

六

ただし、物語作者が明石の君を大堰に移住させ、二条東院構想を破棄することを決定したのは物語執筆のどの時点であるかを確認することは難しい。明石の君が大堰に移り住むと物語に示された時点で、初めて二条東院構想の破棄が確認されるとするしかないであろう。

ところで、絵合巻の巻末は以下のように語り収められる。

大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、いますこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなんと深く思ほすべかめる。昔の例を見聞くにも、齢足らで官位高くのぼり世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわざなりけり。この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり。中ごろなきになりて沈みたりし愁へにかはりて、今までもながらふるなり。今より後の栄えはなほ命うしろめたし。静かに籠りゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べん、と思ほして、山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ、仏経のいとなみ添へてせさせたまふめるに、末の君たち、思ふさまにかしづき出だして見むと思しめすにぞ、とく棄てたまはむことは難げなる。いかに思しおきつるにかといと知りがたし。

（絵合(2)三九一―三九三）

「山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ」とある御堂は松風巻に嵯峨の御堂として登場する。この嵯峨の御堂は明石の君の住む大堰の山荘近くに建てられ、源氏が大堰の明石の君のもとに通う際この御堂を訪れることが口実とされるところからすると、既にこの絵合巻巻末の時点で明石の君を大堰に住まわせ、そこに源氏を通わせるという構想が出来上がっているということになる。とすると、物語本文から二条東院構想の破棄が確認されるのは、絵合巻巻末ということになる。

また、蓬生巻巻末で

二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。対面したまふことなどはいと難けれど、近き標のほどにて、おほかたにも渡りたまふに、さしのぞきなどしたまひつつ、いと侮らはしげにもてなしきこえたまはず。

（蓬生(2)三五五）

と末摘花の二条東院入りが語られる。この蓬生巻巻末の部分が語られた時期は、源氏二十九歳四月、末摘花との再会が語られて以降、関屋巻の逢坂の関での空蝉との再会が語られる九月晦の以前に位置することから、源氏二十九歳の夏から秋にかけての期間ということになる。末摘花が二条東院に移ったのは、その二年後ということであるから、末摘花の二条東院入りは源氏三十一歳の夏から秋ということになろう。さらに、松風巻冒頭、源氏三十一歳の秋に二条東院の完成が告げられるが、だとすると末摘花が二条東院に入ったのは源氏三十一歳の秋以降ということになる。先にも引用した

二条院いと近き所を造らせたまふを、「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童べなど求めさぶらはせたまへ」

（蓬生（2）三五三）

という文章で、末摘花を二条東院に住まわせるため末摘花に「よろしき童べ」などを探すよう源氏が指示していることを勘案すると、末摘花も二条東院完成直後に二条東院に入居したと考えるのが妥当であろう。

ところで、二条東院の完成が源氏三十一歳の年とされたのは、源氏二十九歳の春に生まれた明石の姫君をなるべく早く都に迎え取り、紫の上の養女とし、紫の上のもとで裳着を行いたいという思惑が働いていたからと考えられる。当時、裳着が執り行われる際、子供の年齢は最も早くても三歳というのが常識であったようであるから、明石の姫君の裳着を最も早い時期に行うためには、明石の姫君は三歳までに二条東院に引き取られ、紫の上のもとに迎えられる必要があった。もちろん、そのためには明石の君も明石の姫君とともに上京する必要がある。

そのような事情から、二条東院は源氏三十一歳の年には完成していなければならなかった。そのことは既に蓬生巻巻末で

二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。

（蓬生（2）三五五）

と記された時点で、物語作者に十分承知されていたと思われる。

ところで、もしこの蓬生巻巻末執筆時点で、既に明石の君が明石から二条東院に直接入らず大堰に移り住むことが予定されていたとしたら、明石の君は北、冬という属性を賦与されることになり、二条院の西の対に東、春を表象する紫の上、二条東院の東の対に西、秋を表象する明石の君、西の対に南、夏を表象する花散里、北の対に北、冬を表象する末摘花を配するという二条東院構想は崩壊していたことになる。

明石の君の大堰移住によって、二条東院構想では西、秋を表象することになっていた明石の君が、北、冬を表象する女性へと変化し、北、冬を表象することを予定されていた末摘花は北、冬を表象する女性である必要がなくなる。しかも、明石の君の表象する方位、季節の変更によって空席となった西、秋を表象する女性は、紫の上と同等の重みを持つ存在でなければならないが、末摘花が紫の上と同等の重みを持つ女性でないことは明らかである。とすると、末摘花は新しく造営されるであろう四方四季の邸宅で、東、西、南、北のいずれかの方位と春、夏、秋、冬のいずれかの季節を表象する女性から排除されることになる。

さて、ここで先に引用した松風巻冒頭部分をもう一度示してみよう。

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対はことに広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人々集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見どころありてこまかなり。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さる方なる御しつらひどもしおかせたまへり。

（松風(2)三九七）

引用した本文では、二条東院の完成が語られるとともに、二条東院の西の対に花散里が入居し、東の対には明石の君の入居が予定されていると語られる。しかし、末摘花の入居に関しては何も語られることがない。そして、この引用した部分に続いて明石の君の大堰移住の物語が語られることになるのだが、この明石の君の大堰移住によって、明石の君は二条東院構想で予定されていた西、秋を表象する女性から北、冬を表象する女性へと定位し直され、その結果、二条東院構想で北、冬を表象する

ことになっていた末摘花は、四方四季の邸の方位と季節を表象する女性としての資格を失うことになる。蓬生巻巻末以降末摘花が物語に登場するのは、六条院完成後の玉鬘巻で、源氏が正月に彼の庇護のもとにあるそれぞれの女性に衣装を贈る場面である。そこでは末摘花は蓬生巻巻末の叙述を承けて二条東院に居住している。

以上の事実を勘案すると、松風巻冒頭の二条東院完成の場面で、明石の君と花散里の名が告げられるのに、末摘花の名が挙げられないのは、物語作者が二条東院の完成、すなわち二条東院構想の終焉が語られる時点において、新たに造営される四方四季の邸でそれぞれの方位とそれぞれの季節を表象する女性のみに焦点を当て、それ以外の女性をなるべく排除しようと意図した結果ではないかという推測が成り立つ。末摘花は新しい四方四季の邸において、方位と季節を表象する女性とはなり得ないため、彼女の二条東院入居は末摘花巻巻末でなされ、松風巻冒頭部分でその名が告げられることがなかったのではなかろうか。もし、このような推測が許されるなら、二条東院構想は末摘花巻末の時点において、既に放棄されていたことになる。

*

ところで、松風巻で明石の君が明石から東北の方角にある大堰の山荘に船で移るのとほぼ同時期に、源氏は急遽桂に邸を構えるが、大堰川（桂川）は、大堰から東南に流れ、桂に達している。明石の君の山荘は川縁にあり、亀山の麓から湧き出た水は、明石の君の山荘の遣水を通って、大堰川に流れ込み、東南の桂に至り、桂の木を生育させると考えると、先に引用した兼明親王の祭文の一節、「夫水者稟二秋気於庚之金一、盛二正位於北方一、養二春味於震之木一、帰二末流於東南一」という表現との対応が見て取れる。さらに、桂の木を生育させるとは、桂の邸の主、光源氏の栄華を一層輝かしいものとするとの意を読み取ることもできるであろうから、それは明石の地から明石の姫君を連れて大堰に入り、源氏に姫君を譲り渡し、后候補として源氏のもとで養育することによって、源氏の栄華を不動のものとすることを寓意していると解釈することもできよう。

源氏は大堰の明石の君の山荘を訪ねた後、桂の院に赴き公達を饗応する。この時饗宴に遣わされた冷泉帝からの使者への禄を大堰から取り寄せているが、この大堰の明石の君から桂の院の源氏のもとに帝の使いに対する禄の品を贈るという行為は、「夫水者稟二秋気於庚之金一、盛二正位於北方一、養二春味於震之木一、帰二末流於東南一」という表現に対応する行為、すなわち明石の入道が明石で築いた莫大な財力が明石の君とともに大堰にもたらされ、その財力がこれ以後の源氏の栄華を支えることになることを象徴的に物語るものといえるのではなかろうか。

また、大堰の東南にあたる桂の地は、五行思想では木であると同時に青龍の住む地でもある。とすると、桂に存する桂の院の主である源氏は龍と見なすことができよう。また、明石の君は、若紫巻で源氏の従者良清の話によって物語に初めて登場するが、その話を聞いた源氏の従者たちは、明石の君を「海竜王の后になるべきいつきむすめなり」（若紫(1)二〇四）という。また物語では、この他に須磨巻、明石巻にそれぞれ一箇所「海の中の竜王」という表現が出てくる。私は以前拙論で、物語で海竜王が強調されるのは、石川徹が指摘するように物語に海幸山幸神話ばかりでなく、浦島伝説が強く影響をおよぼしているのか、あるいは本来海竜王の后となるはずだった明石の君を源氏が横取りするという物

語の結構故のことと推定したが、[15] 海竜王の后となるべき明石の君を妻とした源氏は、海竜王に匹敵する存在と考えることができるのではなかろうか。

物語は、明石の入道が明石の姫君を得た心境を「いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して」（松風(2)四〇三）と語り、姫君を夜光る玉に喩えるが、この夜光る玉について河野貴美子は次のように述べる。[16]

中国では古来、宝玉と言えば「隋珠和璧」と並称されてきた。「隋珠和璧」とは「隋侯の珠」と「和氏の璧」のことで『淮南子』巻六「覧冥訓」高誘注（後漢）にそれぞれの説話が並べ載せられている。（中略）

さて、隋珠と和璧の連称は『史記』「鄒陽列伝」や「李斯列伝」などにも見え、『文選』「西都賦」（後漢・班固）や「西京賦」（後漢・張衡）にも後宮を飾るものとして「隋侯明月」や「夜光」が並び見える。

ここで注意したいのは、「夜光」の玉とはそもそも和璧や、その他の「璧」に用いられる形容で、隋珠を「夜光珠」とする表現はもともと見られないことである。ところが時が下ると、中国説話の展開の中で、隋珠すなわち霊蛇珠を「夜光」のものとする表現が現れ、やがて「龍の夜光珠」というものが多く見られるようになるのである。そして『源氏物語』の「夜光りけむ玉」も、こうした説話の系譜上に生まれた表現ではないかと考えられるのである。

河野の指摘によれば、「夜光る玉」は龍の所有物ということになり、明石の姫君を子に持つ源氏はここでも龍と見なすことができる。石川徹は「そもそも四季にあてた広大な宮殿というのは、伝承の世界でいえば、竜宮城である」、「六条院の世界では、いわば、海竜王にあたるのが太政天皇に准ぜられた光源氏で、明石の上はその后になったようなものである」とするが、[17] 以上見てきた点を考慮すれば、石川のように四方四季の六条院は竜宮城であり、海竜王である光源氏がその主であるとする読みもより蓋然性を帯びたものとなるであろう。

注

(1) 『源氏物語』は、『新編日本古典文学全集』に拠る。
(2) 篠原昭二『源氏物語の論理』6「『源氏物語』の成立過程の一節」（東京大学出版会、平成4年）
(3) 拙稿「二条東院構想試論（上）」（『白百合女子大学紀要』51号、平成15年12月）
(4) 田坂憲二「二条東院構想の変遷―明石の君母子の処遇をめぐって―」（『源氏物語の人物と構想』所収、和泉書院、平成5年）は、物語作者は明石の君母子の上京を姫君の袴着のタイム・リミットのぎりぎりまで遅らせることで、上京・母子離別・袴着を一点に集中させ、明石の君の心情を深みのあるものとすると同時に、二条東院に入りにくい存在とし、かつ身分的落差故に姫君を手放さねばならない明石の君の荒涼たる心情を効果的に表現する背景として、厳冬の大堰川のほとりの山荘という時空を設定したのではないかと推測する。
(5) 『花鳥余情』は、『源氏物語古注集成』に拠る。
(6) 『新編日本古典文学全集　源氏物語2』の付録「漢籍・史書・仏典引用一覧」に拠る。
(7) 『和漢兼作集』は、『図書寮叢刊　平安鎌倉未刊詩集』に拠る。
(8) 鷲山茂雄「『源氏物語』『松風』巻と兼明親王」（『平安朝文学研究』復刊5号、平成8年12月）
(9) 『扶桑略記』は、『新訂増補　国史大系』に拠る。
(10) 『源氏物語古注集成』の静嘉堂本の本文に拠る。

(11) 『本朝文粋』は、『新日本古典文学大系』に拠り、柿村重松『本朝文粋註釈』に従い、一部私に改めて読み下した。

(12) 『新編日本古典文学全集』では、この引用本文分は「冬になりゆくままに、桂の住まひいとど心細さまさりて」とあるが、明石の君の住まいは桂から遠く隔たった大堰にある。「桂」は他文に認められる「かはつら」に改めるのが適切であろう。

(13) 『論語』は、『新釈漢文大系』に拠る。

(14) 『古今集』は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

(15) 拙稿「『源氏物語』と『古事記』日向神話—潜在王権の基軸—」(『古代中世文学論考』15集所収、新典社、平成17年)

(16) 河野貴美子「夜光りけむ玉」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識　絵合・松風』(至文堂、平成14年) 138、139頁。

(17) 石川徹『平安時代物語文学論』(笠間書院、昭和54年) 第十三章「明石の上論」